



2024年4月15日発行（季刊）



# う 羽 化 か

ISSN1880-8646  
2024年4月  
第129号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会  
〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1-1105 Tel 090-9003-7279  
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣  
編集責任者 宮 沢 義 文

## 散歩 西六郷三丁目公園の朝



## 目 次

漢点字の散歩（65）	（岡田健嗣）	.....	1
字式について（3）	（岡田健嗣）	.....	9
点字から識字までの距離（122）	（山内 薫）	.....	12
漢文のページ		.....	20
ご報告とご案内		.....	22
編集後記	（宮澤義文）	.....	23

## 漢点字の散歩 (六十五)

岡田 健嗣



カナ文字は仮名文字 (16)

前回・前々回と、人麻呂歌の文字の使い方を、ざっと見て参りました。特に漢字の音読・訓読が、どのように用いられているか、また、後の平安時代の仮名文字の表記に、どのように繋がっているのか、その基点になるのがこれらの人麻呂歌であることは言を俟ちません。前回まで見て来た所から言えることは、漢字の音読・訓読や文字遣いは、既に現在ののそれと同様の原則が、この人麻呂歌に見られること、言い換えれば、わが国最古の歌集である『萬葉集』において、漢字の音読・訓読と文字遣いは、現代とそれと同様になされているというところが、知らされたのでした。

そこで繰り返しになりますが、もう一度この十二首の歌を、見て確認して見たいと思います。

一二四七

大穴道 少御神 作 妹勢能山 見吉

大汝 少御神の 作らしし 妹背の山を 見

らくしよしも

(おほなむち すくなみかみの つくらしし

いもせのやまを みらくしよしも)

「大穴道」、「おほなむち」は、その地を統べる者の意で、出雲神話の長である、「大國主命」を指します。原文では、現代の訓読で「おお・あな・みち」の文字が当てられています。読み下し文では、「大汝」と表記されています。同じ「おほなむち」も、記・紀では「大己貴」と表記されます。

次の「少御神」、「すくなみかみ」は現代の訓読と同じ「すくない・み・かみ」と読む文字が当てられています。この神は記・紀で「少彦名神」（すくなびこなのかみ）と呼ばれて、「高皇産霊神」（たかかみむす

ひのかみ)の子と言われる神で、高天原から出雲の国へ派遣されました。記・紀では、海原を小さな船に乗って渡って来て、大国主を補佐して、出雲の国の経営に当たったとされています。身体が小さく、忍耐強い神様であったとあります。

次の「作」、「つくらしし」、「訓読の「つくる」で、送り仮名と助詞が省略されています。原文も読み下し文も文字は「作」、現代の訓読と同じ「つくる」と読ませています。

「妹勢能山」、「いもせのやま」、女夫のように、あるいは恋人のように二つ並んだ小さな山の風景。

「見吉」、「見らくしよしも」、大変よい姿だ。

「いもせ」、「いも」は男性から見た愛しい女性、肉親の姉妹、また妻あるいは恋人を呼ぶ語です。そして「せ」は、女性から見た愛しい男性、兄弟、また夫あるいは恋人を呼ぶ語です。「いもせ」には、普通「妹背」の文字が当てられます。「妹」は現代の訓読でも「いもうと」、「いも」と読んでもよい文字ですが、「背」は、現代の訓読で「せ」とは読みますが、意味としては身体の後ろ側の面、背中、背丈という意

味を表す文字です。愛しい男性としての「せ」の音に「背」の文字が使用されることはありません。現在私達が使用する日本語では、「いも」の音は「いもうと」、あるいは愛しい女性を指して使用されることはあっても、「せ」の音は、愛しい男性を指して使用されることはないのでしょうか。つまり「背」の文字ばかりでなく「せ」の音も、女性から見ての愛しい男性という意味で使用されることは、すでに久しくなくなっていると考えてよいように思われます。

『萬葉集』では、その原文では「いもせ」と読む語の表記として、「妹勢」の文字が当てられています。また読み下し文では、「妹背」の文字が当てられています。このことから言えることは、「いもせ」の「せ」の音に、「背」の文字が当てられるようになったのは古点以後か、早い時期を想定しても八世紀の末辺りかと、私は素人ながら考えております。

原文で、「せ」の音に「勢」が当てられていること、これは如何にも音仮名のように見えますが、果たしてそうなのか、むしろ「背」の文字を使いたくなくな

つたからと考えられはしまいか、当時の口語で既に「せ」の音で愛しい男性を指す語が成立していて、それをどう表記するかが問われていたとして、「背」の文字は、使用し難かったのではなかったか、もう既に漢字の訓読は完成していて、漢字の意味から、日本語の読みを導き出すという方法は、訓読が成立していることから見ても明らかですので、「背」の文字の意味に、「背を向ける」という意味があることは十分理解されていたに違いありません。「北」という文字が、二人の人が背を向け合った形を象った文字であることも、「背」も、その意味を承けて「そむく」と訓読されることも、既に衆知されていたに違いありません。そうしてみると、「いもせ」の「せ」にどの文字を当てるかということは、案外難しい課題だったのかもできません。後に「背」の文字を当てることになるわけですが、恐らく人麻呂がこの歌を作った当時には、まだ「背」の文字を当てることは、共通の認識にはなっていないかったというので、止むなく「勢」の音読の音を借りて表すことになったというのではないか、私はそんな風に受け止めました。後に「背」の文字

を、愛しい男性の意味の「せ」の音に当てて、この使用法が「背」の訓読に「背中・背丈」と並んで加えられたものと考えてよいのではないのでしょうか。

因みに「せ」の音で読む訓読の文字は、他にどんなものがあるか挙げてみますと、「脊」（セキ）、これは「背」と同じ人の背中・背骨を意味します。「畝」（ホ）、畑の「うね」、また田畑の面積の単位、一アールにやや足りないほどの面積です。「瀬」（ライ）、水の流れの狭く浅く早いところを指します。海でも、狭い海峡、潮の流れの速い海峡を言います。そして現在では用いられないものに、「諾」（ダク）があります。承諾する時の「はい」という意味とされています。これらの文字は、「いもせ」の「せ」には当てられませんでした。

#### 一二四八

吾妹子 見偲 奥藻 花開在 我告与

我妹子と 見つつ偲はむ 沖つ藻の 花咲きたらば 我れに告げこそ

(わぎもこと みつつしのはむ おきつもの  
はなさきたらば われにつげこそ)

「吾妹子」、「わぎもこ」は、愛しい女性を呼ぶ語です。都に残して来た妻を指した語と読んでよいと思われまます。「わぎもこ」は、「わが・いも・こ」を縮めて撥音されたもので、文字も「吾・妹・子」と、訓読がそのまま当てられています。訓読がそのまま当てられているということは、訓読の成立に間を置かずに使用された語と理解してよい語、漢字の訓読と同程度に古い語であると考えてよいと、あるいは訓読が成立してから文字を並べて、それをそのまま訓読して使われるようになった語とも考えてよい語とも言えるのかもしれない。何れにせよわが国でも最も古い歌である人麻呂の略体表記のこの歌以来、愛しい女性を指す語として、数多の歌に登場するのがこの「わぎもこ」です。また、原文の最初の文字「吾」は、読み下し文では「我」に代わっています。「吾」と「我」は、使われ方が少々異なると言われますが、現代に至って、一人称の代名詞の「われ」には専ら、「我」が用いら

れるようになっていきます。勢い「吾」の使用範囲は狭くなっているようです。

「見偲」、「みつつしのはむ」、原文では「見」と「偲」の漢字二文字だけで表しています。読み下し文では「つつ」と「はむ」のかな文字を補って、「(わぎもこ)と見なして偲ぼう」と読みます。何を見なすのか、「奥藻」、「おきつもの」、読み下し文では「沖つ藻の」、原文は「奥」、読み下し文では「沖」、海のおきを意味する文字が使われています。そうでなければ「藻」を出すことはできません。

「花開在」、「花咲きたらば」、花が咲いたら、「我告与」、「我れに告げこそ」、私に教えて欲しい。原文で「花開在」、「はな・ひらく・あり」と訓読する文字が使用されていて、それを読み下し文では、「開」を「咲」、「在」を「てあらば」|| 「たらば」と読ませています。「花」が開花することを「咲く」と言います。「在」は「ある」、「さいたならば」と読んでいます。「我れに告げこそ」、私に教えて欲しい、藻の綺麗な花を見ながら、都の妻を思い起こそう。「与」を「こそ」、助動詞でしょうか、と読

ませます。

一二四九

君為 浮沼池 菱採 我染袖 沾在哉

君がため 浮沼の池の 菱摘むと 我が染めし

袖 濡れにけるかも

(きみがため うきぬのいけの ひしつむと

わがそめしそで ぬれにけるかも)

「君為」、「君がため」、ここで言う「きみ」とは、女性から見ての愛しい男性、夫のことと解されま  
す。「あなたのために」の意、現代語と同じ訓読と言  
ってよい読みです。「浮沼池」、「うきぬのいけ  
の」、「浮沼」は現在でも使用される語で、泥の深い  
沼の意です。ここでは、泥の深い沼のような池で、  
「菱採」、「菱摘むと」、菱の実を摘もうとして、菱

は、水辺に生える草の名です。根は泥の中、葉は水面  
に浮いていて、秋に堅い実を付けます。古くから食用

として珍重されてきました。菱の実の採集は、食料の  
確保に直結したものでした。ここでは、その実を摘ん  
で家に持ち帰ろうとして、となります。原文では  
「採」が使われていますが、読み下し文では「摘」が  
当てられていて、「つむ」という行為を強調している  
ように見えます。

「我染袖沾在哉」、「我が染めし袖濡れにけるか  
も」、私が染めた着物の袖が濡れてしまった。菱の生  
えているような池沼の泥は深く、その水に濡れた袖  
は、その泥で大いに汚れてしまったのでしょうか。原文  
では「沾」が用いられています。読み下し文では  
「濡」が当てられていて、単に「ぬれてしまった」と  
さほどの拘りを感じさせませんが、原文では、「沾」  
が使用されていて、この文字には濡れて汚れるという  
意味があると言います。また原文の最後が「在哉」と  
結ばれていて、これを、「けるかも」と読み下してい  
ます。

先の歌は、旅先の夫が都の妻を思い、この歌では、  
出先の妻が、家で待つ夫を思うという形を採っていま

す。

一二五〇

妹為 菅實採 行吾 山路惑 此日暮

妹がため 菅の実摘みに 行きし我れ 山道に

惑ひ この日暮しつ

(いもがため すがのみつみに ゆきしわれ

やまちにまとひ このひくらしつ)

「妹為」、「妹がため」、愛する女性(妻)のために、先の歌では「君がため」と歌い始めて、女性が男性に向けて歌った歌でしたが、ここでは男性が女性に向けて歌っている形です。

「菅實採」、「菅の実摘みに」、菅(すげ)の実を摘もうと。「菅」は、野山に自生するカヤツリグサ科の植物です。カヤによく似た、極めてありふれた植物です。その実を妻のために摘んで、ここでも原文では「採」を、読み下し文では「摘」を使用しています。

「行吾」、「行きし我れ」、菅の実を求めて山中に入った私だが、ここでも「われ」に、原文では「吾」、読み下し文では「我」の文字が当てられています。

「山路惑」、「山道に惑ひ」、山の道に迷ってしまつて、原文では「山路」、読み下し文では「山道」が使用されています。現在では「やまち」と読む場合は、「山路」と原文と同じ表記をしますが、歴史的には「道」を「ぢ」と読ませた時期もあったようです。

「此日暮」、「この日暮しつ」、日が暮れて、山中で一夜を明かすこととなつてしまった。

『萬葉集釋注』に、この歌の類歌、

妹がため 玉を拾ふと 紀伊の国の 由良の岬に  
この日暮らしつ (一二二〇)

(いもがため たまをひりふと きのくにの ゆら  
のみさきに このひくらしつ)

があるとあります。

これらの歌は「羈旅」としてまとめられていて、旅先で家で待つ妻、あるいは夫のために、家づとにする物を求めて苦勞する姿を歌っています。食料であったり、美しい玉石であったり、妻、あるいは夫の喜ぶ顔を目に浮かべながらの歌ということが言えます。

以上の四首は、「人麻呂歌集」から取られた歌で、柿本人麻呂の作である可能性が高いもので、あるいは人麻呂が集めた歌を、人麻呂が書き写して保管していた歌ともされて、その歌に人麻呂が補筆して、新たな形とした歌であるとも考えられています。何れにせよ、柿本人麻呂の最初期の作品と考えてよいと考えられます。

以上は、『うか』一二七号に掲載した拙文（「漢点字の散歩」六十三）を、角度を変えて書き換えて見ました。この結びは一二七号と同じ見解となりますので、左にそのまま引用します。ご容赦下さい。

「私の拙い試みとして、歌の漢字に音読・訓読の読みを当ててみました。このような試みはさほど珍しくないものかと思っておりましたし、多分その通りなものでしょうが、私にとってその結果は、極めて意外なものでした。

私の予想では、これまで読んで来た万葉集の歌々には、現在の訓読とはかなり相違した読みが与えられていたように感じていましたので、ここに取り上げた四首の歌も、同様にかなり異なった訓読がなされているものと思っておりました。もともと、そのように思っておりましたのも、それらの歌の読みに、読み下しも含めて、非常に苦勞させられたという経験が関与しているのかもしれませんが、またここに取り上げた四首の歌に用いられている漢字が、偶々現在の訓読と同様に読まれているということなのかもしれません。とは申しても、わが国の文字の表記の最初期の「万葉集」に用いられている漢字の読みが、千数百年を経た後の現代の文字と、同じように読むことができるということは、驚きを持って見られるべきと思われるなりませ



ん。

しかしここに、面白いことに気づかされました。固有名である「大穴道」は「おほあなむち」↓「おほなむち」、「少御神」は「すくなみかみ」、「妹勢能山」は「いもせのやま」、「浮沼池」は「うきぬのいけ」、そして固有名ではありませんが、「吾妹子」は「わぎもこ」と、訓仮名（勢と能は音仮名ですが）が当てられていて、一つの韻律をなしているように思われることです。この韻律は、これよりもずっと以前の日本語と、現代の日本語とを結ぶ架け橋になるもののように思われます。そしてこの固有名に訓仮名が当てられていることで、訓仮名が訓読の成立なしには叶わないものとしてみれば、訓読と訓仮名がフィードバックすること、万葉の世が明けることになったのではないか、何かそういう筋道が描けるように思われて来るのでした。

何れにせよはつきりしていることは、わが国の文字表記の最初期に位置するこの「万葉集」は、既に音読・訓読ばかりでなく、係り結びや枕詞など、極めて

高度な言語表現によって形作られております。言い換えれば、わが国の先人は、まだ文字表記を実現する以前に、このような高度なポテンシャルを手にしていたのだと言うことができます。

何も文献のないころに、いきなり「万葉集」のような高度な文学作品群が生まれるなどということが、実際に起こりました。実際それ以前には、文献と言える文献は残っておりません。「万葉集」の記事から言えることは、「人麻呂歌集」のようなものは、作られていたらしいことは知られます。人麻呂の作った歌、人麻呂が集めた歌が収められていた集があったと考えられています。これらは「万葉集」の大きな柱として、その所要所に収められていると言われます。また、『書紀』には、それ以前の文書の所在が記されているようですが、残念ながら残っておりません。

以上、『万葉集』の世界を視覚障害者にも知っていただいで、言語生活の厚みを養っていただきたいと願って止みません。」

## 字式について (三)

岡田健嗣

前二回では、漢字の字形を数式の形で表す方法である「字式」の概要を申し上げました。

今回から、実際の文字の字形をどのように「字式」として表すか、ご紹介したいと思います。

漢字の音読を五十音の順に並べます。

「亜」      ア      (アク      つぐ)  
一・ “口 \ // ” ・一

「哀」      アイ      あわれ      あわれむ      (かなしい)  
衣 ÷ 口

「愛」      アイ      (いつくしむ      したしむ)  
ノツワ冠 / 心 / 女 (すいによ)

「悪」      アク      オ ヽヲ、      わるい      (にくむ)  
亜 / 心

「惡」      亜 / 心

「握」      アク      にぎる  
手偏 + 屋

「圧」      アツ      (オウ ヽアフ、      おさえる      しずめる)  
厂 (がんだれ) > 土

「壓」      厭 > 土

「厭」      エン      いとう      あきる  
厂 > “日 / 肉月 + 犬”

「安」      アン      やすい      (やすらか      いずくんぞ)  
ウ冠 / 女

「案」      アン      (つくえ      かんがえる)  
安 / 木



「暗」 アン くらい  
日偏 + 音

「位」 イ ㄝ、 くらい  
人偏 + 立

「困」 イ ㄝ、 かこむ かこう  
口 (くに構え) > 井

「圍」 口 > 韋  
「韋」 イ なめしがわ  
カー / 口 / ㄝ

「医」 イ (いしゃ いやす)  
匚 (かくし構え) > 矢  
「醫」 “医+爿 (ル又)” / 酉

「依」 イ エ (よる)  
人偏 + 衣

「委」 イ ㄝ、 (まかす)  
ノ木 / 女

「威」 イ ㄝ、 (おごそか おどす)  
戊 (つちのえ) > “一/女”  
「戍」 たれ - 戈 (ほこ)

「胃」 イ ㄝ、 (い いぶくろ)  
田 / 肉月

「唯」 イ ㄝ、 ユイ (しかり これ ただ)  
口偏 + 隹 (ふるとり)

「尉」 イ ㄝ、 (ウツ ひのし じょう)  
尸 (しかばね) > 示 + 寸

「異」 イ こと (ことなる あやしむ)  
田 / 共



「畏」 イㄥキㄨ ワイ おそれる  
 田 / 一・<sup>^</sup>衣下

「移」 イ うつす うつる  
 ノ木偏 + 多

「偉」 イㄥキㄨ えらい (すぐれる)  
 人偏 + 韋 (なめしがわ)

「韋」 イ なめしがわ  
 カー / 口 / キ

「意」 イ (おしはかる おもう ころろ ああ)  
 音 / 心

「違」 イㄥキㄨ ちがう ちがえる (めぐる たがう)  
 しんによう @+ 韋 (なめしがわ)

「韋」 イ なめしがわ  
 カー / 口 / キ

「維」 イㄥキㄨ (つな つなぐ これ)  
 糸偏 + 隹 (ふるとり)

「慰」 イㄥキㄨ なぐさめる なぐさむ (ウツ いやす)  
 尉 / 心

「遺」 イㄥキㄨ ユイ (おくる のこす うしなう)  
 しんによう @+ 貴

「緯」 イㄥキㄨ (よこいと)  
 糸偏 + 韋<sup>˘</sup>なめしがわ

「韋」 イ なめしがわ  
 カー / 口 / キ

「域」 イキㄥキキㄨ (ちいき くいき くぎる)  
 土偏 + 或 (わく)

「或」 ワク ヨク コク イキㄥキキㄨ くに ある あるい  
 は  
 “口／一” < 戈 (ほこ構え)

# 点字から識字までの距離（一・二・三）

山内 薫

## 高齢者施設でのお話し会一五の方法（二）

この数年、コロナ禍で高齢者施設への入所入室が制限されるようになり、図書館からの訪問も全面的に中止を余儀なくされた。そのため二〇二〇年以降ほとんど訪問ができない状態だったが、昨年の末あたりからボチボチ訪問の依頼が来るようになってきた。

以下まだ試案の段階ではあるが、私の経験から考えられる高齢者施設での催し物についての十五の



写真1 マイクを使って読む

方法を列挙してみたい。

### 一、大きな声で話す、できればマイクを活用する

高齢者施設に入所していたり、デイサービスに通っているお年寄りには耳の聞こえにくい方がとても多いので、大きな声で話す必要がある。そのような状況から、どこの施設でもマイクとスピーカーのセットは用意されているので、それを借りてマイクを使って話すことが賢明だろう。子ども向けのお話し会などではなるべく肉声で語る

ことが良いとされているが、高齢者向けのお話し会ではマイクは不可欠といっても良い。

（写真一 マイクを使って読む）

しかし、個人または数人に対して話す場合には、マ



写真2 ボードを使って要約筆記

イクを使わず、大きな声で話すと良い。

また、中には耳の聞こえない方もおり、メモボードに話している言葉を要約筆記したこともある。(写真

二 ボードを使って耳の不自由なお年寄りに要約筆記)

## 二、ゆっくり、はっきり話す

大きな声で話すだけではなく、ゆっくりとはっきりした声で話す。特に登場人物の名前やその物語の中核となる言葉については、しっかりと立てて、ていねいに話す。読む絵本や紙芝居などは、何度も下読みし、半分暗記するくらいで実演するのが望ましい。(写真三 ほとんど暗記して読む)



写真3 暗記して読む

三、絵は柄が大きく、遠くからでも見やすいものを選

ぶ

お話し会では絵本や紙芝居などを目の前で見る事が出来ず、皆さんある程度の距離から見ることになるので、絵や図柄が大きくてはつきりした作品を選ぶ。

紙芝居はあらかじめ大勢の人が見られることを想定して作られているが、絵本には遠目には見にくいものもたくさんあるので選択には気を付ける。(写真四 大きな図柄の紙芝居「めがねやどろぼう」)

その点、行事用大型絵本は高齢者施設でのお話し会に向いている。

## 四、紙芝居を活用する

三でも述べたように紙芝居は「芝居」なので、大勢



写真4 紙芝居 めがねやどろぼう

の人が見ること前提に作られている。また紙芝居舞台を使うことによって臨場感が生まれ、注意を引きやすい。紙芝居を演じるときには聞いている人の顔を見ながら、読み手の顔を隠さずみんなに見えるようにして読む。紙芝居の中には「愛染かつら」「金色夜叉」など昔の街頭紙芝居やそれを編集した作品もあるので選んでみよう。

一九五〇年代の街頭紙芝居を江東区立深川図書館が保存しており、借りて上演したことがあるが大変好評だった。（写真五 街頭紙芝居「疾風鞍馬天狗」）



写真5 紙芝居「疾風鞍馬天狗」

### 五、長い話は短くする（リライト）

高齢者の方が集中して見られる（聞ける）時間はおよそ一〇分以内、五〜七分程度なので出し物はそのく

らいの時間が良い。長い作品を取り上げる場合には、短くリライトすることも検討したほうが良いだろう。あらずじに直接関わらない部分はカットするとか、前半を抄訳して簡単に済ませ、核心部分からはそのまま読むなど、工夫して読む。

### 六、歌を取り入れる（歌詞は大きく拡大して手元に、手遊びも）

高齢者施設のお話し会では、絵本や紙芝居以上に歌が喜ばれる。お話しには関心を示さなくても歌になると元気に歌って下さる方が多くおられる。歌はお話しなどのように受け身ではなく自分が参加できるので、皆さん生き生きと歌われる。お話し会の合間や最後に2曲程度の歌を取り入れることでお



写真6 模造紙に書いた歌詞「茶摘み」

話し会にメリハリができる。特に、季節にちなんだ歌や季節の行事にちなんだ歌を取り上げると良いだろう。

1月は「お正月」、3月は「うれしいひな祭り」、5月は「こいのぼり」、7月は「たなばた」等々。

歌詞は模造紙に大きく書いて見てもらうやり方と大きな活字で紙に印刷したものを一人ひとりに配るやり方がある。模造紙の場合には皆さんが比較的よく知っている歌や、茶摘みのように手遊びをしながら歌うものなどに向く。懐メロなどの場合には、できれば手元に

大きな活字（22ポイント）で印刷した歌詞（写真6）があると良い。（写真6 模造紙に書いた歌詞「茶摘み」）

お話し会の途中で歌詞を一人ひとりに配った場合には、手元に歌詞の紙があるとそちらに気を取られる方がおられるた



写真7 口伝で歌詞を伝える

め、歌が終わったら歌詞を一旦回収した方が良いでしょう。（写真7 配付した歌詞と視覚障害入所者に口伝で歌詞を伝える）

七、応答形式で参加してもらおう（サラリーマン川柳の虫食い・いろは歌留多）

皆さんに答えを問いかける応答形式のクイズなども取り入れると良い。例えばサラリーマン川柳（昨年からさらっと一句！わたしの川柳に改称）の虫食い。

「また値上げ 節約生活 もう〇上げ、の〇にはどんな漢字が入るでしょう。」

「8時だよ 昔は集合今〇〇、の〇〇は？」

コロナ禍でお店が早じまいする……」

（写真8 サラリーマン川柳「飲み過ぎて駅のホームがマイホーム」）

また、いろは歌留多

の絵を見てもらって読み札の言葉を当ててもらおう。桜



写真8 サラリーマン川柳



の花と団子を頼張る人の絵を見てもらい「花より団子」と答えてもらう等々。

#### 八、回想法・昔の出来事、記憶を呼び戻す

回想法は過去の記憶を思い出すことで脳に刺激を与え、認知症の進行を緩やかにすることが期待されている。昔の出来事や女優の写真などをプロジェクターで映して見ても良かったり、駄菓子屋で売っていた物の写真を大きくして、見てもらったことがある。また、昔の遊び歌「ずいずいずっころばし」



写真9 花いちもんめ

「花いちもんめ」なども動作も交えて行うと良い。  
(写真九 花いちもんめ)

#### 九、地元の素材を活用する

郷土資料や地元の誰でも知っていたり、行ったことのある場所、近くの名所などにまつわる、話や写真、絵はがきなどを紹介すると良い。例えば浅草寺の絵葉

書、とうきょうスカイツリーの写真、スカイツリーからの富士山等々。

(写真十 東京スカイツリーから見える富士山)

#### 十、実物を見てもらう

紙芝居や絵本の中に出てくる物の実物を見てもらってから話を始めると効果的。

風の又三郎の中に出てくる歌の「青いクルミ」、紙芝居「スキミミズク」など。「めぐろのサンマ」を読む前に冷凍サンマを持ってきて見せた読み手もいた。

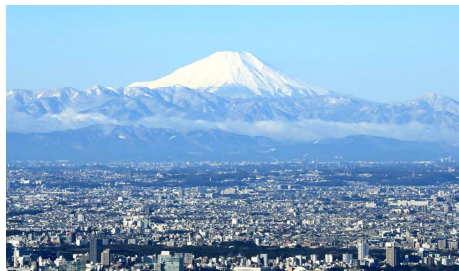


写真10 富士山

また「どんぐりころころ」の歌を歌う前にどんぐりを見てもらい、何の木のだんぐりか当ててもらおうこともできる。

(ただし、ドンぐリのように認知症の方がたべもの間違えて口に入れてしまう可能のある小さいものについては、直接手渡しする場合には充分気をつける必要

がある。以前羽子板の先に付ける黒い球、ムクロジの実を袋に入れて持って行って見てももらったことがあったが、手に持った方から職員が慌てて回収したことがあった経験による。）

また風の又三郎についての話で初めて出てくる歌

どっどど どっどど どっどど

青いくるみも吹きとばせ

すっばいく

わりんもふきと

ばせ

どっどど

どっどど どっどど

うど どっど

を大きな活字で

紙に印刷して配

り、聞いたこと

があるか尋ねる

と昔映画で見た

という方がおられた。

の映画と思われる。しかし緑の果肉に包まれたオニグ



写真11 風の又三郎の話と歌

ルミの実が何の実か分かった方はおられなかった。（写真十一 風の又三郎の話と緑の紙に印刷した歌）

### 十一、負の記憶に注意する

生きてこられた中で負の記憶を持っている方がおられる。今でも津波の映像がテレビで映る前には「この後津波の映像が流れます」というコメントが表示される。

以前、火事を体験した方が街頭紙芝居の火が燃え盛る場面を見て火事を思い出して恐くなったと話されたことがある。空襲、地震、



写真12 街頭紙芝居

津波、火事などを連想させる絵や話を含む作品を取り上げる場合には気を付ける必要がある。(写真十二 街頭紙芝居の火の燃え盛る場面)

## 十二、プライバシーを尊重する

個人のプライバシーに関する話をお話し会のみんなの前でするのは避ける。親しみを込めたつもりで話しかけても、相手がどう受け止めるか、みんなに前で話されることをどう思うか分からない。

例えば「お孫さんは何人ですか?」「どんなお仕事をなさっていたのですか?」「家はお近くですか?」等々。

ただし、お話し会の前後に個人的に話しかけられたときはその限りではない。(傾聴ボランティア活動があつて、話したい高齢者がおられるこ



写真13 和服で大相撲の写真を見る

とも事実であるが)  
十三、服装に気を付ける(黒づくめは避ける、着物は人気)

昔、黒のジャージの上下をいつも着て高齢者施設に行っていたとき、「何で、いつも黒い服を着てくるのだ」といわれたことがある。(同日の午前中、乳幼児向けお話し会で会場設置と片付けが重労働のため動きやすい黒のジャージを着ており、そのまま午後高齢者施設に行っていた)

出来れば明るい色や違和感のない服装でお話しを行った方が良いでしょう。

着物を着て来て下さる読み手

の方がいたが、着物の柄や帯に興味を持って話しかけ



写真14 手品

てくる方もいた。

(写真十三 和服で大相撲の写真を見て貰う)

#### 十四、手品などの余興も出来れば良い

一時アマチュアの手品師の方が来て下さっていたことがあり好評だった。我々も簡単な手品を教えていただいて他の施設で行ったことがある。(写真十四 毎月手品をして下さったMさん)

また、いろいろな物売りの声「タケヤー サオダケ」「キンギョーエ キンギョ」「イーシヤキーマー」等々を演じて下さった方もいた。

一度プロの幫間の方が民謡や歌を三味線の伴奏付で歌って下さり、その後いろいろな芸を披露して下さったこともある。

(写真十五 悠玄亭玉さんの余興)



写真15 悠玄亭玉さん

#### 十五、大活字本や拡大写本、DAISY図書などを紹介する

図書館には様々な高齢者向けの資料があるが余り知られていないので、大きな文字の本(大活字本、拡大写本)やデジ録音図書・市販の文芸CDなど耳で聞ける資料のあることをPR出来ると良い。希望があれば訪問の際にリクエストされた資料を持って行ければ良いだろう。(写真十六 拡大写本を紹介する)

以上十五の方法について述べてきたが、まだよく整理されていない部分も多く、今後より分かりやすくしようと思っている。感想や意見などがあつたら是非寄せて頂きたい。



写真16 拡大写本を紹介

詩経より 王風

采葛

彼<sup>ノ</sup>采<sup>ラン</sup>葛<sup>ヲ</sup>兮  
一日不<sup>レ</sup>見<sup>ハザ</sup>

如<sup>シ</sup>三<sup>ニ</sup>月<sup>ノ</sup>兮

彼<sup>ノ</sup>采<sup>ラン</sup>蕭<sup>ヲ</sup>兮  
一日不<sup>レ</sup>見<sup>ハザ</sup>

如<sup>シ</sup>三<sup>ニ</sup>秋<sup>ノ</sup>兮

彼<sup>ノ</sup>采<sup>ラン</sup>艾<sup>ヲ</sup>兮  
一日不<sup>レ</sup>見<sup>ハザ</sup>

如<sup>シ</sup>三<sup>ニ</sup>歳<sup>ノ</sup>兮

蕭<sup>しょう</sup>（せう）  
カワラ  
ヨモギ



葛<sup>かつ</sup>  
クズ



艾<sup>がい</sup>  
カ  
ヨモギ  
モグサ

采<sup>さい</sup>葛<sup>かつ</sup>

彼の葛を采らん 一日見わざれば  
三月の如し

かのかつをとらん いちじつあわざれば  
さんげつのごとし

彼の蕭を采らん 一日見わざれば  
三秋の如し

かのしょうをとらん いちじつあわざれば  
さんしゅうのごとし

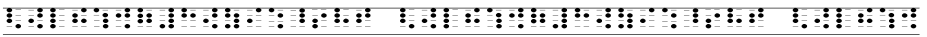
彼の艾を采らん 一日見わざれば  
三歳の如し

かのがいをとらん いちじつあわざれば  
さんさいのごとし

采<sup>さい</sup>に同じ。摘みとる。

韻文の句中や句末に置かれ、語勢を示す。  
訓読では読まない。

クズやヨモギを採りに（という口実で）出かけたが、彼には会えず、一日がまるで三月（みつき）のよう、まるで三秋（9カ月）のよう、まるで三年のよう、まるで長く思われる。



採 葛

彼 ノ 采 ラン 葛 ヲ 兮 一 日 不 レ  
 バ 見 ハ 如 シ 三 月 ノ 兮  
 彼 ノ 采 ラン 蕭 ヲ 兮 一 日 不 レ  
 バ 見 ハ 如 シ 三 秋 ノ 兮  
 彼 ノ 采 ラン 艾 ヲ 兮 一 日 不 レ  
 バ 見 ハ 如 シ 三 歳 ノ 兮

『詩経』 中国最古の詩集。周の時代を中心とする紀元前11世紀～前6世紀ごろの詩305篇が採録されている。漢の武帝の時に五経のひとつとされ、重んじられた。

詩は、風（ふう）・雅（が）・頌（しょう）に分けられ、風は民間の歌謡に由来すると思われるものが多い。

風（国風ともいう）は、さらに15の地方にわけられ、「王風」は東周の王都（洛陽）を中心とする地域の詩である。

詩の解釈

詩経は長い歴史の間に様々な解釈がなされてきた。

儒家では、各詩に付された前書き（詩序）の解釈を絶対のものとし、ふつうに恋愛詩と思われるような詩も、別の内容を持つものとされた。

「采葛」は詩序に「讒ざん（讒言）を懼おそれている」とあり、留守中に上司に告げ口をされて失脚するのを心配しているとする。

近代では詩序の解釈に縛られることなく、詩のうたわれた当初に立ち返り、自由な解釈と鑑賞をするようになった。さらに宗教学や民俗学の知見も加わり、当時の社会や風習とのかかわりが研究されている。

「采葛」は、恋愛詩とも集団での草つみ歌とも解されるが、葛・蕭・艾の植物を神事にかかわるものとして、春の神を迎える歌とみることができる。

参照図書\_新書漢文大系「詩経」石川忠久著・福本郁子編（明治書院）  
「詩経の鑑賞」村山吉廣（二玄社） 他

昨年度（二〇二三年・令和五年度）の、横浜市立中央図書館への納入書として製作しました漢点字訳書は、『古事記』の下巻と、三分冊です。三月中旬には納入を完了しました。

会員の皆様には、深く御礼申し上げます。

今回も、その『新芭蕉俳句大成』に収めてごさいます中から、一句の項をご紹介します。「秋深し」の句とその解説です。

秋深き隣は何をする人ぞ （笈日記）

【考】 元禄七（一六九四）年秋の作。季語は「秋」で秋。元禄八年刊行の底本に載るもので、大阪滞在中の同七年九月二八日に作られた句である。底本によれば、この日睦止（けいし）亭で句会があり、次の日の夜に予定されていた芝柏（しはく）亭の句会の発句として作られた。ただしこの翌日の二九日から芭蕉は泄痢（せつり）に悩まされて病床につき、そのままた次第に病状が重くなって一〇月一二日に死没しているから、芝柏亭の句会は中止になったのであろう。

【解】 秋もすっかり深まった夜、隣の家からかす

かに物音が聞こえてくる。隣の人は何をしているのだろうか、の意。夜とはいっていないが夜の情景であろう。それも人が寝静まった頃であろう。普通なら物音がするはずのない夜更けに、かすかな物音が聞こえたので、こんな夜更けに何をしているのだろうかと隣の人の関心が生じたのであろう。

（中略）

【評】 この句は芝柏亭の句会の発句として作られたものだから、挨拶の意図があるかどうかということの問題になるが、挨拶の意図を読み取るべきかどうかという見解はない。「挨拶の心をどう読むかは一つの問題点」だという『全句』にしても、「挨拶の意は淡い」と述べている。諸家の解釈の基調は隣の家では物音一つしなないとらえているが、「壁ごしの物音」がきっかけでこの句が出来たという『安東芭蕉』の見解は注目すべきである。隣を意識したのは、何も聞こえてこないからではなく、隣から何か聞こえてきたからだと考えるのが自然であり、『安東芭蕉』の見解は説得力がある。ただし「壁ごしの物音」と限定する必要はなからう。またこの句を「軽み」と結びつけて考えている『明治講座』の見解も注目すべきである。なお、この句が作られた以前において、芭蕉が之道亭に滞在中した確証は見当たらない。

〔田中善信〕

## 編集後記

今号で山内様の「高齢者施設でのお話し会」から、

話し手は、高齢者がどうしたら興味を持って、話をきこうとするか、話し方を工夫しているようです。例えば、道具や現物を利用したり、専門家をお願いしたり、人を変え、品を変える試みが行われていることがよく分かりました。前々回の「障害者の子供さんに読み聞かせする」との基本はよく似ているように思えました。

興味を持たせる話し方は、常に努力・工夫することである。障害者、高齢者にかかわらず誰に対しても、話を聞いてもらい、興味を持ってもらい、理解してもらうためにどう進めるか考え実践することが大切なことと改めて感じました。

この春、桜を楽しまれましたか。開花する時期に寒くなったり暑くなったり、大雨・強風になったりと、天候が定まらず今年は難しいと思っていました。私は横浜の三ツ池公園でソメイヨシノやオオシマザクラなどそれなりに楽しめました。

宮澤義文

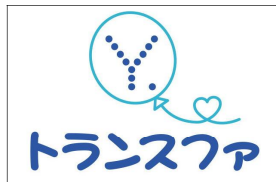
## (有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。

研修者募集：弊社では、ガイドヘルパー（視覚障害者）の資格取得研修を実施致します。詳細はホームページで。



URL: [www.ytrans.net](http://www.ytrans.net)

〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1105

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : [okada\\_tr\\_eib@ybb.ne.jp](mailto:okada_tr_eib@ybb.ne.jp)

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は2024年7月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。